

文化圈的視点による祭礼研究の可能性： 堺市鳳だんじり祭りの事例から

人間科学部人間社会学科 野中 亮

抄録：曳山祭りの一種である堺市の鳳だんじり祭は、岸和田だんじり祭の影響を受け、近年その祭りの様式が変質しつつある。これまで多くの伝統的祭礼の研究が行われてきているが、このような複数の祭りの関係性を論じる文化圈的視点の有効性についてはほとんど認識されていないようにも見受けられる。本稿の目的は、これらだんじり祭の事例を通じて祭礼研究における文化圈的視点の有効性を検討することである。

キーワード：だんじり祭、鳳、岸和田、文化圏

大阪府堺市の鳳だんじり祭は、近畿圏に広く伝播しているだんじり祭を代表するもののひとつである。もっとも、近年では岸和田市でとり行われる「岸和田だんじり祭」がメディアを通じて全国的な知名度を誇っており、岸和田のスタイルこそがだんじり祭の標準的な様式であるとの認識が広く根付いていることも推測される。しかしながら、この岸和田の祭の様式は広く近畿圏に分布するだんじり祭群全体からみれば、岸和田型の「下地車」¹⁾を曳く一部の地域のスタイルであって、かならずしもだんじり祭の一般的様式ではない。歴史的・系譜的には大きく二つのタイプ、すなわち岸和田を中心とする下地車エリアと、堺市鳳地区を中心とする「上地車」エリアが存在し、もともと数の上では圧倒的に上地車を曳く地域の方が

多かったのである。

ところが現在では地車の新調時に上地車を下地車に変更する地域が増加するなど、伝統的なだんじり分布図に大きな変化が見られるようになってきた。この地車の型の変化はそのまま祭礼の様式の変化を意味し、祭礼様式の変化は地域組織や地域間関係の変容を意味する。つまり、祭礼を通じて地域社会のありようを分析しようと試みる我々にとって、この祭のスタイルの変化は単なる祭礼の意匠の問題ではなく、地域構造の根幹に関わる問題となってくるのである。

一方で、このような複数の祭の間でのスタイルの伝播・共変の問題は、従来の祭礼研究においては中心的な課題となっていなかった²⁾。本稿では、だんじり祭の例に見られるような、もともと同種

- 1) 本稿では、祭の名称としてはひらがな表記の「だんじり」を用い、祭礼で使用する曳行用の山車を「地車」と表記して区別する。なお、下地車と上地車の構造の違いについては後述する。
- 2) もともと何の縁もない地域で、他地域の祭が新規に（改変されて）開始される例については、それなりに研究の蓄積が存在する。主に関東地方で取り入れられている「阿波踊り」や、いまや全国各地で見ることのできる「よさこい祭」を取り上げた研究がこれにあたる（内田、2002）（阿南・内田・才津・矢島、2000）（矢島、2003）。しかし、これらの研究の大半は村・町おこしや町づくり等の地域振興の問題や、祭の「移植」の問題に焦点をあわせたものである。われわれの関心は、これらのように伝統-新規、オリジナル-コピーのダイアド関係に焦点を置くものではなく、もともと近接し、相互作用を保ちつつも個々の祭礼がネットワーク的に存在している状態を念頭において、これを研究課題とするものである。

の祭が広範囲に分布しており、かつ個々の祭礼間に相互作用が認められる同種の祭礼群を「文化圏」としてとらえ、この分析視角の有効性を検証したい。具体的には、岸和田だんじり祭を中心とした文化圏内部でのヒトの周流と鳳だんじり祭における「岸和田化」の問題を中心に文化圏の視点から事例を検討する。なお、鳳だんじり祭の詳細については、拙稿（野中、2007）を参照されたい。

1. 鳳だんじり祭におけるヒトの周流

(1) 対外的周流

だんじり祭は、山車の曳行を祭事を中心とする曳山祭の一種である。曳山を曳行するには一定数以上の熟練した参加者を必要とするため、祭礼の実行にあたっては相応の人員を確保しなければならない。盆踊りなどの舞踊系の祭においては参加者の人数の問題はいわば祭の規模の問題にすぎないが、曳山祭においては、あと一人欠けた瞬間に曳行が不可能となる臨界点が明確に存在するということである。また、だんじり祭の場合、地車の構造や曳行スタイルの特性上、曳行に関わる者には技術的な熟練が要求される³⁾。近年、伝統的祭礼の多くは人員の不足に悩んでいるが、だんじり祭の場合、技術的な障壁が新参者の参加のハードルとなっているため、さらに厳しい状況に置かれ

ているわけである。

こうした状況下、南大阪地域一帯のだんじり祭では、近接する地域の間で曳き手の交換がおこなわれている。地車の曳き手の中には、地元の祭と日程の重ならないよその祭にも参加している者が多数いるのである。こうした行為は「多町曳き」「助っ人曳き」、曳き手は「助っ人」と呼ばれることもある⁴⁾。

鳳の場合、祭礼は10月第1週の金土日曜⁵⁾であるが、鳳の祭の参加者の中には、9月におこなわれる岸和田の祭礼や同じ10月でも日程の異なる地域に「他町曳き」に出かける者が多数存在している⁶⁾。鳳地区内の各町⁷⁾にどの程度「他町曳き」を行っている者がいるのか、その全体像の詳細は把握できていないが、これまでの調査から、岸和田旧市および春木地区、泉佐野、平野などでの「他町曳き」経験者を確認している。また、逆に岸和田をのぞくこれらの地域や津久野・八田荘・草部・泉佐野などの周辺地域からの鳳地区への「他町曳き」も確認している。

また、町によっては交流の深い特定の外部地区がある場合もあり、そうした地区とは「他町曳き」「助っ人曳き」の他に、相互の祭見物や、地車新調・改修後のお披露目への出席など、様々な互酬的行為が慣例化している。たとえば、近接する諸地域との間でみられる互酬的行為の例としては、

3) 岸和田市春木地区の祭礼関係者によれば、下地車の場合、最低60人の熟練した曳き手が必要だという。この人数は、地車を曳くための綱や方向転換用の梃子を担当する者、および指示係の「大工方」をあわせた人数である。

4) 一部の地域では「外人部隊」などのマイナスイメージの伴う表現で呼ばれていることもある。

5) ただし、「二日（にいび）」と呼ばれる大鳥大社の地域行事がこの時期に重なっていた場合、祭は1週間延期される。「二日」とは、毎月2のつく日に大鳥大社の境内で衣類や野菜などのフリーマーケットを開催する月例イベントである。

6) 大阪府南部のだんじり祭は、その開催時期から「九月祭礼」と「十月祭礼」のふたつに分別される。

7) 鳳地区には、大鳥、野田、新在家、北王子、野代、長承寺、上、石橋、富木、濱寺元町の計10地区が祭礼団体として存在するが、これらはすべて旧村時代の地名（字）であり、現在の町名ではない。しかしながら、鳳地区の住民の間では日常生活でもこれらの地名が使われており、自治会などもこの地域割りを意識して運営されている側面がある。したがって、これら各地域を「町」と呼ぶのには語弊もあるが、一般的な語感とのズレをなくするため本稿ではこれらの祭礼団体を便宜的に「町」と呼ぶこととする。

隣接地域である八田荘や草部との「交流会」⁸⁾などがあげられるだろう。

だんじり祭が行われている地域間で周流するのは彼ら曳き手ばかりではない。だんじり祭には熱心なファンが存在するが、彼らは各地の祭礼スケジュールを熟知しており、さまざまな地域に見物に出かける。彼らはかつてだんじり祭に関わった経験者であったり、祭に参加したくともできない女性のファン、自町の祭を終え、他地域の祭を見物ではなく見学にいく現役の曳き手たちなどである。いわば彼らはいわゆる観光客とはことなる、だんじり見物の「玄人」であると言える。こうした目の肥えた客の周流は、地車の曳行について、個々の祭の相対化や広域的な価値基準の創出など、だんじり文化圏の基盤の構築につながる要因ともなるのである。

(2) 対内的周流

鳳の外部とのヒトの周流に対置する形で、鳳内部でのヒトの周流にもふれておこう。ここで注目するのは、青年団組織における鳳内部の各町間でのヒトの周流である。

だんじり祭における青年団の役割は、地車曳行において前綱を担当することである。もちろん、準備段階でもさまざまな責務を負う地域組織であるが、祭礼の当日は地車の「動力」として地車前方に取り付けられた綱にとりつき、文字通り地車を曳く役割を受け持っている、祭の花形部署の一つである。大きなものでは1台4tもある地車を人力だけで曳き、しかも全力疾走を続けるのであるから、若い者にしか勤まらないセクションでもある。従って、構成メンバーの年齢は、地域によって若干幅があるが、おおむね高校生から20代後

半が一般的である。

さて、青年団のメンバーは、従来は出身町の団に所属することになっていたが、現在では鳳地区内のいずれの町に属してもかまわないことになっている⁹⁾。その結果、曳行の主力である青年団の規模が地区の人口構成に比例しない上、年毎の変動が激しい。

所属青年団の選択は個人にまかされているため、別組織のメンバーシップがそのまま青年団に持ち込まれ、高校の同級生などが集団で特定の町に所属するといった事態が頻発する。青年団の人数はそのまま曳行のスピード・見栄えなどに直結するため、各町は高校生の「人気」に敏感にならざるを得ない。地車本体・速さ・曳行スタイル¹⁰⁾・規律の厳しさなどが高校生の評価基準となるため、町の「個性化」が嫌が応にも助長されることとなる。

ただし、団長にはその町の出身者が就任することが普通である。また、青年団から後楯子に異動する場合には自町組織に戻ってくるのが一般的である。ただし、町内組織で主要なポストを歴任しつつキャリアを積むためには、地元青年団で三役クラスを経験し、上位組織での地歩固めに備えるのが理想的である。

2. ヒトの周流の影響

(1) 外部との周流が鳳に及ぼす影響

外部とのヒトの交流は鳳の祭礼に大きな影響を及ぼした。祭礼の「岸和田化」である。具体的には、地車の下地車化、それに伴う「やりまわし」の導入や「鳴物」「衣装」など曳行にまつわる風俗の変化などである。

まず、地車の下地車化についてであるが、1970

8) 正規の祭礼の前に特定の町同士で行うイベント。正式な祭礼とは無関係。

9) いっごろからそのようになったのか、詳細は不明であるが、70年代に祭礼運営組織の大きな改変があった頃からはなかったか、という関係者の意見も聞かれた。

10) 後述するが、鳳地区では堺型の上地車と岸和田型の下地車が混在しており、これが「ロケットスタート」「やりまわし」等の曳行スタイルを左右する。

年代～80年代にかけての時期に「折衷型」が制作され初め、90年代になると新調はすべて下地車に切り替わってしまっている（表参照）。70年代後半から80年代というのは、高度成長期に衰退傾向にあった伝統行事が全国的に再評価され始めた時期であり¹¹⁾、また、岸和田だんじり祭りが全国的な注目を集め始めた時期でもある¹²⁾。つまり、折衷型が導入されだした70～80年代は、それまで横並びであった各地のだんじり祭から、観客動員やメディアへの露出などの点で岸和田が突出しはじめた時期なのである。一方で、「祭りブーム」のさなか各地のだんじり祭で地車の台数が増え始め、多くの地車を少人数で曳くという傾向が強まった時期でもある。

さきに述べたように、90年代に入ると新調はすべて下地車という状況になっており、2009年

新調・購入だんじりの型の変遷

地区	型	年
石橋	上地車	1890年（明治23年）
大鳥	下地車	1931年（昭和6年）
野田	上地車	1932年（昭和7年）○
長承寺	下地車	1969（昭和48年） 岸和田市河合町から購入。制作は明治2,30年代
野代	折衷型	1976年（昭和51年）
新在家	折衷型	1977年（昭和52年）
濱寺元町	折衷型	1988年（昭和63年）○
北王子	下地車	1997年（平成9年）○
上	下地車	1998年（平成10年）○
富木	下地車	2000年（平成12年）○

現在、長承寺が下地車の新調を決定している他、野田や石橋などでも下地車化が検討されている。地車の変化は、そのまま曳行スタイルの変化に直結する。なぜなら、構造上大きな差のある上地車と下地車は曳行方法が異なっており、方向転換の仕方や走行のスピードやリズムなど、地車の変化はあらゆる面に影響を及ぼすのである。

もっとも特徴的なのが、「やりまわし」の導入である¹³⁾。やりまわしは、スピードに乗ったまま減速を最小限にとどめ、一気にカーブをまがるという曳行のモードを指す。転倒・衝突などの危険性も高まるが下地車の最大の見せ場ともいわれるやりまわしは、岸和田の祭を全国区にした最大の要因でもある。逆に、上地車は重心が高いためやりまわしには不向きである。下地車化とは、このやりまわしをしたいがために下地車を導入した結果であるといえるだろう。また、下地車を曳行するにはやはり下地車に適したお囃子＝「鳴物」が必要である。このように地車本体だけでなく曳行方法なども下地車化してくると、法被などの衣装も導入されるようになる（図1、2）。図2は若い女性の「編み込み」というヘアスタイルだが、これも鳳に先立って行われる岸和田の祭礼でのスタイルを見物に行き、参考にしている者が多いという。もはや曳行には直接関係ない部分も、同時に導入されるのである。

「昔の囃子かて違ごたがな。我々や少し下の世代はテンテン、テンテコテ、テンテン、ソーラ、ヨイヨイ 言うてこの地方独特の囃

11) 高度成長期の伝統的祭礼の衰退と、その後の「地方の時代」「こころの時代」における祭礼の復興については芦田（芦田，2001）を参照のこと。

12) 岸和田だんじり祭が全国的な注目を集めたきっかけは、1972年にNHKが放送した「ふるさとの歌祭」という番組であるとされている。

13) 地元関係者によれば「やりまわし」の開始は15年前とも20年前とも言われているが、いずれも確証はとれなかった。ただ、各町での聞き取りの結果と折衷型・下地車の導入時期からおおよその推測は可能である。上地車ではなくなったところから順次やりまわしを開始し、鳳地区で「やりまわし」が一般化するのにもなって上地車でもやりまわすようになったと考えられる。

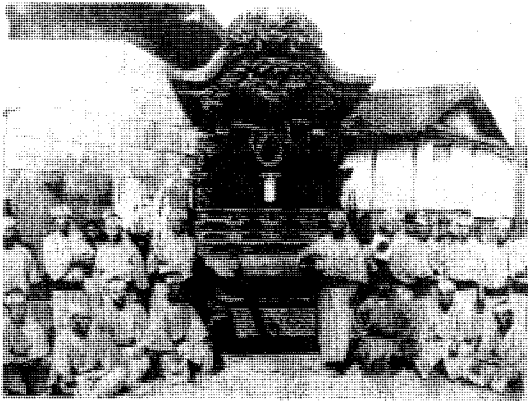


図1：浴衣姿で曳く戦前のだんじり（野田地区）

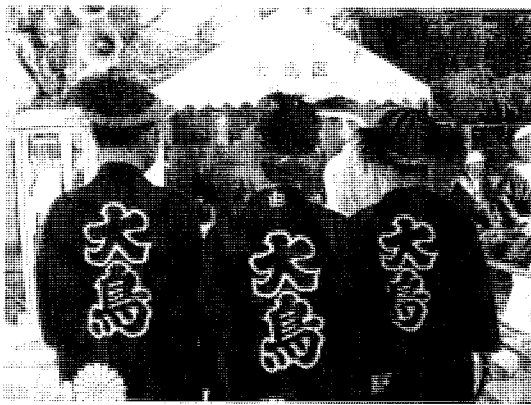


図2：大鳥地区のはっぴを着た編み込みスタイルの女性

子で走ってたけど、だんだんと岸和田になびいていったわ。太鼓かてそうや、昔の太鼓のたたきもあって、そのたたきもこの地区の独特のもんがあった。今はもう岸和田式でやなー、愛想ないわな、いろいろな音色を入れて、囃子も入れて太鼓をたたいたんや。」¹⁴⁾

「昔我々の時分は、浴衣があるやろ、それ着て曳いてた。それで尻かけして曳いてたんやけど、危ないということで、半被になってきたんや。そして下に股引・パッチやろ、岸

和田式にみんななってきた。昔は全部浴衣着てたんやで、曳き手も役員もみな。浴衣は尻かけしてても落ちてくるやろ、だんだんと岸和田に習って、半被のほうが動きがいいということで、そうやって変わってきた。」

さて、この下地車化＝「岸和田化」の原因はどこに求められるべきであろうか。メディアの影響を否定することはできないが¹⁵⁾、それ以上に岸和田などで下地車を曳いた、もしくは見たという直接的な経験を重視すべきであろう。いわば楽しさの身体レベルでの経験である。インタビューなどからも、「やりまわし」のスリルや、テレビカメラや観客の注目を浴びる快感は、メディアという2次的体験とはその影響力が全く異なることが推測される。

実際「旧六ヶ村」（大鳥、野田、新在家、北王子、野代、長承寺）以外の町が鳳での連合曳きの魅力を語るときも、必ず持ち出されるのが観客の多さである。岸和田春木地区で「助っ人曳き」をしている上地区のインフォーマントも、春木で曳く理由を「とにかく観客が多くて気持ちいい」と述べていた。また、岸和田旧市での助っ人経験をもつあるインフォーマントは、見せ場である「こなから坂」を曳いたときの気持ちを次の様に語ってくれた。

「助っ人だの外人だのさんざん言われて、二度とこの町で曳くか、思ってたんですが、こなから坂のところではね、スタートする前にグッと頭下げて待っていると、だんだん音が聞こえんようになってくるんですわ。緊張いたしますか、鳥肌たつ言うか。で、が一っと走る。そんな訳ないんですけども、息も止めて走っ

14) 新在家では一部、鳳地区固有の鳴物が残されている。

15) 「鳳（大鳥）だんじりも悪くはなかったが、岸和田には「お城」と「紀州街道」というロケーションまで備わっていたため、マスコミが取り上げるのにはうってつけの祭であった」〔桧本、2000：8〕

てるような気がして、で、終わったらあーっと景色が見えてきて、音が聞こえてきて。すごい数の観客の姿と、ドーっいう声、ちゅうか音ですわ、聞こえてきて。もうね、あれは別格ですわ。」

このような、認識レベルにとどまらない、身体レベルでの体験にもとづいた「岸和田化」は、鳳の祭を大きく変容させた。しかし、一方で、その「岸和田化」を通じて、鳳地区の独自性が認識されるようになったのである。岸和田との関係においては「理想のだんじり祭」というモデルを前にしてその影響下にある鳳を客観視することになり、周辺の上地車地域との関連においては「堺の正統上地車」という鳳のアイデンティティが確認されるのである。

(2) 地域内における周流の効果

さて、次に鳳内でのヒトの周流はどのような効果をもつのであろうか。まず指摘できるのは、地域内での青年団の発言権の拡大である。曳き手の確保のためには流動的な青年団構成員を引きつける必要がある。そうなると、祭礼組織の特徴でもあった伝統的な上意下達方式の運営ではそっぽを向かれてしまう可能性があるため、下の意見を吸い上げる民主的な運営が試みられるようになる。これは必然的に青年団の発言権を強めることに繋がる。また、青年団の発言権の増大は、上の世代

の伝統的な鳳の祭への愛着を断ち切り、「岸和田化」を押し進めることのできる大きな要因の一つともなるのである。

団員個人のレベルでみた場合、自町で曳くのみならず、さまざまな場所で様々なタイプの地車を曳いているという経験は、祭礼組織内でのキャリアアップの資源となる場合もある。だんじり組織におけるキャリアは段階的な序列構成を持つ。前綱から始まり後艇子にまわってようやく一人前というシステムは、一朝一夕では曳けない地車曳行の技術的な敷居の高さを前提としている。こうした「熟練」を前提とした組織構成において、条件のことなる他地域でも曳いてきたという実績は、一定の技術力の保証と見なされることもあるのである。また、連合組織で重視される他地域との人脈を有するということにもなり、これらはキャリアアップの資源として非常に有効である。

3. 「だんじり文化圏」の周縁としての鳳

「歴史性」「正統性」では引けを取らないはずの鳳だんじり祭が岸和田を模倣の対象としている現状は、鳳内部に「岸和田化」／独自の上地車文化の継承という二者択一的な葛藤を生み出す。この対立は、ヒトの周流によって世代間対立にも関連しており、また、変容と維持、近代化と伝統といった価値の対立とも繋がっている¹⁶⁾。さらに、岸和田が絶大な影響力をもつ「だんじり文化圏」にお

16) こうした文化の「正統性」とその変容の問題については、ホブズボウム [1983=1992] の「伝統の創造」論をはじめとして、さまざまな議論がある。伝統と（特に近代以降の）創造を区別するホブズボウムの議論を「本質主義的」とするハンドラーとリキネン [1995]、「沖縄の琉球化」という事例の検討を通じて「伝統」を集合的な解釈主体の連続的な意識としてとらえる森田 [1997]、文化変容を主体的に選択・解釈されたものとしてとらえ、主体のアイデンティティ形成にかかわる問題であるとする大田 [1993] など、枚挙にいとまがない。こうした状況を整理した小川 [2009] は、文化遺産論の文脈からであるが、対内的事象／対外的事象、ポリティクス／ポエティクスという2つの軸を設定し、A 集合的アイデンティティ形成・維持論、B モノの意味生成原論、C 意味発信のメカニズム論、D 他者への権力作用論の4つに研究の視点を分類している。A では集合的な自己の確立と維持に果たす文化遺産の役割などの論点、B は記号論などの視点を含む論点、C には文化遺産が新しい意味や価値を生成する実践のメカニズムに関する論点（文化経済学などはここに位置づけられる）、D にはフーコー的知識・権力論、オリエンタリズムやコロニアリズムに関連する論点が位置づけられている。

いては、すでに上地車文化の相対的地盤沈下が進行しており、単純な二者択一というよりは、「岸和田化」か上地車の死かという消極的選択しか残っていないかのような悲観的な捉え方さえ一部に生み出すこともあるのである。

このような状況下で、岸和田は鳳に代表される周辺のだんじり祭にとって、ひとつの「成功モデル」として認識されている。だんじり文化圏において、岸和田は現代的な魅力と社会的評価をともなった、だんじり祭の「成功モデル」なのである。具体的には、下地車＝「やりまわし」というという現代的な楽しさを持つ祭の中心地であるということ、祭の規模（集客力）、マスコミへの露出、補助金など行政からの協力を得つつも外部の近代的な圧力におもねることなく「だんじり三原則」を貫徹している＝自立・自律している、という意味で、だんじり文化圏の中心として認識されているということである。

しかしながら、「岸和田化」は伝統的祭礼を浸食する祭の「日常化」¹⁷⁾ そのものでもある。岸和田をモデルとし、岸和田のような形で「成功」することを望めば、岸和田並の規模、組織力、求心力が求められるが、これらがともなわない地域における形式的・表面的な「岸和田化」の進行は、祭の標準化を自動的に招聘するという逆説的な事態も起こりうるからである。ここでいう標準化とは、下地車化、「やりまわし」・パレード・連合曳きなどの一般化、行政からの支援への依存、その

条件としての祭礼組織の近代化・民主化、観光資源化への志向などを意味するが、このような標準化は、「岸和田のような祭」を目指す以上、されられない事態となる。

鳳地区の場合、行政との関係に関しては一定の距離を保つことに成功している¹⁸⁾。しかし、曳行スタイルなど祭の風俗に関する部分では、「上地車文化の中心地」という地域アイデンティティと引き換えに、かなり強い標準化が進みつつある。この標準化は、鳳地区内の各町の独自判断に基づく個別の変化という体裁をとっているが、実際には鳳全体が「岸和田化」しつつあるという明確な方向性が露呈してしまっている。にも関わらず、鳳地区全体としてはこの変化の評価について、明確なコンセンサスが引き出せないでいる状態なのである。

このような状況下において、鳳におけるだんじり文化圏の意味をもう少し検討してみよう。

まず、おなじだんじり文化圏に属する周辺地域とのヒトの周流は、鳳という地域の自己像を彫琢する大きな要因となっている。「岸和田化」は地域アイデンティティの曖昧化を招くが、一方で、だんじり文化圏の他地域とのヒトの周流がそれらの地域の文化的な多様性と地域アイデンティティを担保する側面も持つのである。岸和田の「やりまわし」を意識することで「スピード」という上地車独自の美学が新たに見いだされ、それが周辺の上地車地域や鳳地区内各町の間での競い合いを

17) 本来、非日常の世界であるはずの祭が、経済原理や近代的な社会規範などに包囲され、日常の枠内に絡め取られてしまう状態をさす。詳しくは芦田（芦田、2001）を参照のこと。

18) 秋祭りシーズンの堺市の広報誌の表紙は、少なくとも2005年まではすべて布団太鼓となっており、地車を取り上げられたことはない。記事を見ても鳳のだんじり祭に触れたものはなく、市行政が鳳だんじり祭と一定の距離を置いていることがわかる。市関係者の聞き取りの際にも、「市役所は基本的にだんじりとは無関係です」と明言していた。祭礼関係者によれば、「言う事を聞かないいうさい連中」がやっている「一度は禁止された祭」に市は乗り気でなく、管理しやすい布団太鼓を市の祭として重用しているのだ、という。しかし一方で、「もうちょっと岸和田みたいに（補助や後援など）してくれてもええんちゃうか」という声も聞かれ、鳳の行政からの「自立・自律性」は祭礼関係者によって微妙な問題でもあった。2008年からは行政による補助が始まっているが、市による支援が始まった経緯の詳細は不明である。

通じて、「上地車＝スピード」という新たな曳行スタイルを生み出すにいたったのである¹⁹⁾。

「うちは晩にえらいスピードで走ります…(略)…(他所の地域の人が)「こんなせまいところを晩に走るなぁ」言うて感心してるくらいや、それがこのへん(鳳)の値打ちだんねん。連合曳きになってからやで、それまでは各村どうしの話し合いで曳いてた時は、そんなに無茶に飛ばしてたことはないけど。連合で全部一斉に走るようになったら、あっちからこっち来るのに半時間もかからんくらいや、ダーッと飛ばしてくるさかい、これが見事やと思うわ。」

しかしながら、一方で鳳は、常に「岸和田化」という「日常化」と「上地車の伝統」の板挟みに会うというジレンマにも直面している。ここでいう「岸和田化」とは、単なる祭礼スタイルの下地車化だけを指すのではなく、岸和田モデルの採用にともなう祭の近代化・日常化の浸透も意味している。

鳳や周辺の地域にとって、いわゆる伝統的文化と近代の軋轢という意味での「日常化」の諸問題には既に岸和田という「処方箋」が存在しており、祭の主体である地域とともに行政などもこれを参照し対応を横並びにする傾向がある。地車の財産権の問題や祭礼警備への警察の関わりかたなど、基本的には岸和田のスタイルを踏襲しているところが多いのである²⁰⁾。また、祭礼団体の方でも、そうした行政などの近代的組織との関係を前提と

した岸和田の祭礼組織をモデルに祭礼と組織の近代化をはかる傾向がみられる²¹⁾。

つまり、だんじり文化圏に属する周辺地域においては、岸和田は近代化の直撃を防ぐ防波堤であると同時に、岸和田内で消化された近代化がそのまま受容されることになる「ソフィスティケート」された「日常化」そのものでもあるという位置づけとなる。

一方で、だんじり文化圏という枠の中で周辺諸地域とネットワーク的な関係を結び、サブカルチャー的な地域アイデンティティを構築することも可能となる。これは場合によっては深刻な葛藤を生み出すものの、地域の「伝統」に付加される形でのあらたな価値観を生み出し、過度の「岸和田化」「日常化」に抵抗する足場を用意することができる。もっとも、実際には抵抗の足場となっているのか、「岸和田化」「日常化」への最後のあがきであるのか判断がつかねるところもあるが、「交流会」にみられるような、岸和田至上主義からの脱却の動きも出てきており、文化圏としての多様性と共生につながる可能性も垣間見える。

4. 積み残しの論点と今後の課題

最後に、積み残しの論点を整理し、今後の研究の方向性を探ることでのこのノートの締めくくりとしたい。

まず、「鳳－岸和田関係」および「鳳－他の上地車文化地域」の関係ををどのように理解すべきか、という問題である。

筆者は緯線、岸和田と鳳との関係を「モデル＝

19) 上地車も元々はスピードを競うような弾き方はしていなかった。鳳の老人たちによれば「昔はトコトコ曳いとった」が、道路環境の変化や「やりまわし」の導入・鳴物の変化がスピードアップを促したのである。

20) 岸和田署警備責任者へのインタビューでは、岸和田での警備モデルが他地域に影響を与えている事を自覚している旨の発言があった。

21) もっとも、祭礼日程の土日化などは先に周辺地域から始まっているが、これは周辺地域における動員の問題が深刻であったことを意味する。また、戦後新規に始められた祭は当然のことながら「伝統」に縛られることなく都合の良い土日開催を選択することができた。

ライバル」論〔ジラール、1961=1971〕的に解釈したことがある（野中、2007）。鳳にとっての岸和田をモデル＝ライバルと見なすという考え方である。この発想は、模倣の極地である「差異の提示によるモデルの反モデル化」によって、だんじり文化圏のサブセクションである「上地車文化圏」のアイデンティティ構成を説明しようというアイデアにもつながるが、「欲望」という志向性のみを対象とする考察になってしまうという問題点があった。祭礼という儀礼について検討を加えるには、身体レベル、行為レベルに関する考察が欠かせないからである。

実際、「人の周流」によって共有される曳行技術や組織内での振る舞い方などの「身体技法」や「価値観」が岸和田型にフォーマットされている、いわば岸和田というモデルの存在が「予期的社会化」を引き起こしている可能性があるということである。もちろん、単に正統性、共有度の高さから岸和田フォーマットが便宜的に利用されているという説明もできるが、こと上地車文化圏においてそれでも下地車型の「身体技法」が採用される場合、すでに岸和田が準拠集団〔マートン、1957=1961〕となっていることの結果と考えるのが自然である。上地車文化圏内で（折衷型＝上下混合型も含め）下地車を曳く、といったケースなどを想定してみれば、すでに上地車文化がフォーマットとされていないのがわかる。

ただ、この「予期的社会化」がだんじり文化圏の共有財となり、さまざまなサブグループの活動を交差させる下地になる可能性も否定できない。なんらかの地盤がなければ「競争」（ジラールの「ライバル」ではない、むしろタルド的な「差異と反復」）も共同行為も不可能である。岸和田モデルがこうしただんじり文化圏の共有財として

の機能を果たしていることも事実なのである。このような観点から、だんじり文化圏における岸和田と他の地域（特に上地車地域）の互酬的な関係を検討していく必要があるだろう。

竹沢（竹沢、1998）によれば、都市祭礼の社会的機能とは、都市の自主管理システムの構築と人的資源の開発と能力の向上に資することであるとされる。この竹沢の議論は、単独の祭礼に関する議論であるので、そのまま文化圏の議論に直結はできないが、だんじり文化圏が個々の祭礼を超えた時限で同様の、または独自の機能をもっているかどうかを見極めなければならないだろう。現状ではまだ分析視点が個々の祭礼から見た文化圏の機能の視点にとどまっているからである。

しかし、だんじり文化圏のような高次のレベルで個々の事例を見ていく場合、一転して支配の体系としてとらえられうる可能性も多分に持っている。つまり、岸和田にとっての周辺地域は文化圏の仲間ではなく、単なる人狩り場もしくは市場なのではないか、という視点の存在である。

博多祇園山笠を、祭礼を通じた周辺地域の経済的・文化的支配を実現するための博多という都市の戦略ソフトであるとする竹沢（竹沢、1998）や、「博多うつし」とよばれる周辺地域への山笠の伝播に関する議論を行っている福間（福間、1994）の指摘は、だんじり祭を文化圏としてとらえる我々にとって、非常に有益な視点を提供してくれるものである。

すくなくとも「岸和田化」には文化的支配の側面を見いだすことができるし、経済的な側面においても、その可能性がないとはいえないからである。片務的な曳き手の周流²²⁾、観客の移動の偏りといった人的資源の問題に限らず、だんじりグッズにおける「岸和田ブランド」²³⁾、行政支援の多

22) 周辺地域と岸和田（旧市）の曳き手の周流は明らかに片務的である。周辺地域同士においては互酬的であっても、旧市の曳き手が周辺地域に助っ人にいくことはまずない。

23) ヒールにエアクッションの入った岸和田の地下足袋は、全国の祭礼関係者の間でもそれなりに有名な「特産品」である。

寡、中古市場も含めた地車市場の存在などは、「文化圏」の経済圏的側面だということができる。

もちろん「支配」の問題の正否を問うことなどは我々の問題関心の埒外であるが、だんじり文化圏内の周辺地域がかかえるジレンマの一因となりうる以上、「支配」というキーワード・仮説は有効でありうるし、その意味で経済共同体の側面は当面看過できない研究課題になるといえる。

参 考 文 献

- Foster, G., 1965, 'Peasant Society and the Image of Limited Good', *American Anthropologist*, Vol. 67.
- 芦田徹郎, 2001, 『祭りと宗教の現代社会学』, 世界思想社
- 阿南透・内田忠賢・才津祐美子・矢島妙子, 2000, 「祭りの「旅」-「ねぶた」と「よさこい」の遠征・模倣・移植」『旅の文化研究所研究報告』9.
- 植木行宣(研究代表者), 2000, 『変容する都市祭礼の文化財的側面に関する総合的研究-大規模祭りにおける山車類の分析を中心に-』科研費報告書
- 内田忠賢, 2002, 「民族世界の地理学9 都市の伝統と現在-よさこい祭りの伝播(後)」『地理』47-1
- 松本多加三, 2000, 「堺のだんじりの歴史と現在」『だんじり堺』堺泉州出版会, 8.
- 太田好信, 1993, 「文化の客体化」『民族学研究』57-4.
- 小川伸彦, 2009, 「宝物・国宝・文化財 モノと象徴のポリティクス/ポエティクス」大野道邦・小川伸彦編『文化の社会学』文理閣.
- ジラール, R., (吉田幸男訳), 1961=1971, 『欲望の現象学』法政大学出版局.
- 竹沢尚一郎, 1998, 「博多祇園山笠」『季刊 民族学』84号.
- , 1998, 「祭の変容」, 島藺進他編『情報社会の文化4 心情の変容』, 東京大学出版会
- タルド, J. G., (池田祥英他訳), 1895=2007, 『模倣の法則』河出書房出版社
- 野中亮, 2007, 「「鳳だんじり祭り」の概要と課題-伝統的祭礼の近代化と地域組織の変容」『大阪樟蔭女子大学 人間科学研究紀要』6.
- 橋本和也, 1999, 『観光人類学の戦略 文化の売り方・売られ方』世界思想社.
- ハンドラー, R., リネキン, J., (川森博司訳), 1995, 「伝統, 本物か? にせ物か?」『世間話研究』第6号.
- 福岡裕爾, 1994, 「山笠の分布とハカタ文化圏」『フクオカスタイル』9, 星雲社.
- , 1998, 「都市文化の周辺地域への伝播」『日中文化研究』12.
- ホブズボウム, E., レンジャー, T., (ed.), (前川啓治他訳), 1983=1992, 『創られた伝統』, 紀伊國屋書店.
- マートン, R. K., (森東吾他訳), 1957=1961, 『社会理論と社会構造』みすず書房.
- 森田真也, 1997, 「観光と「伝統文化」の意識化 沖縄県竹富村の事例から」『日本民俗学』209
- 矢島妙子, 2003, 「「よさこい」系祭りの全国展開の分析-伝播をめぐる統合的枠組みを基礎として」『現代風俗学研究』9

The Effectiveness of Cultural Sphere Perspective in the Analysis of Traditional religious rite: Observation from the case of *Otori Danjiri festival*

Osaka Shoin Women's University
Ryo NONAKA

ABSTRACT

The *Otori Danjiri festival* is one of the float festival in *Sakai* city, in recent years, it has been changing over to the *Kishiwada Danjiri* style. Although traditional festival has been an object of sociological study for a long time, what seems to be lacking, however, is paying attention to importance of cultural sphere perspective that focuses on the relations between multiple objects. The purpose of this paper is to examine the effectiveness of cultural sphere perspective in analysis of Japanese traditional religious rite, *Danjiri festival*.

Key words: *Danjiri festival*, *Otori*, *Kishiwada*, Cultural Sphere